

令和4年度 国立中央青少年交流の家 教育事業
「体験活動普及啓発事業」

富士のさと わくわくキャンプ

令和4年9月10日(土)～9月11日(日) 1泊2日



○目的

異年齢の子供達が自分や他者と出会い、交流の家での宿泊体験活動や集団活動を通して、体験活動の楽しさやすばらしさを感じ取るとともに、基本的な生活習慣の確立や人間関係形成能力向上のきっかけとする。

○参加者

小学校4～6年生 45名(男子:25名, 女子:20名)

○本事業の特徴

職員が事業全体の計画をし、ボランティアはプログラムの一部を企画・立案した。事前研修を通して、ボランティアとともに事業の方向性について共通理解を図った上で、2日間を通して9つのプログラム実施し、子供達の成長を促していった。

○事業内容(参加者の様子)

事業当日は快晴で、45名の子供達が元気に参加した。最初、緊張した様子を見せていた子供達も、活動を重ねるうちに仲間と心が打ち解け合って表情も和らぎ、意欲的に活動する姿が多く見られた。

【事業1日目】9月10日(土)

(1) **みんな仲良くなろうよ(交流ゲーム)** ※ボランティア企画
アイスブレイキングを通して、緊張をほぐし、初めて会った仲間との交流を深めることができた。



みんな仲良くなろうよ

(2) **チームで協力! ビジュアルオリエンテーリング!!**
グループの仲間とさらに交流を深めるため、ビジュアルオリエンテーリングに取り組んだ。



どんな基地が作れるかな?

(3) **どんな基地が作れるかな?(テント設営)**
テントの組立図を配布し、ボランティアがサポートしながら仲間と協力してテント設営を行った。

(4) **わくわくどきどきクッキングPart 1**
グループのメンバーと声をかけ合い、役割分担をしながらカレー作りに取り組んだ。片付けも手際よく行うことができた。



わくわくどきどきクッキングPart 1

(5) **タベのつどい** ※ボランティア企画
引いたお題について、班ごとにジェスチャーを考え、発表した。人前にできることが苦手な子もいたが、みんなが楽しんで活動することができた。

(6) **ナイトプログラム** ※ボランティア企画
キャンプファイヤーを行い、みんなで歌ったり、フォークダンスをしたりして楽しんだ。活動の最後は、グループごとにランタンを囲み、1日の活動を振り返った。



ナイトプログラム

【事業2日目】9月11日(日)

(1) **朝のつどい** ※ボランティア企画

津軽弁のラジオ体操に全員で取り組んだ後、昨日の活動の振り返りや今日の目標について、グループごとにサイコロトークを行った。

(2) **わくわくどきどきクッキングPart 2**

ボランティアが模型を用いて作り方を説明した後、仲間と協力してカートンドックづくりを行った。

(3) **世界に一つだけの丸木のマグネットづくり**

自分へのお土産として、丸木のマグネットづくりを行った。子供達は集中して取り組み、自分なりの作品を完成させていた。

(4) **みんなでわいわいバーベキュー**

1日目に体験したカレー作りを思い返しなが、調理や火おこしを行った。チームワークや作業の手際も良くなり、楽しみながらも調理から片付けまで、スムーズに行うことができた。

(5) **アクティビティメモリアル(ふりかえり)** ※ボランティア企画

2日間の活動の様子を映像で流し、みんなで活動を振り返った。最後に、グループの仲間に向けてメッセージを書き、交換をした。



わくわくどきどきクッキングPart 2



世界に一つだけの丸木のマグネットづくり



アクティビティメモリアル

《参加者の声》 ※事後アンケートより

- 友達ができてうれしかったし、テントで寝ることや料理づくりが楽しかった。
- 初めてのことがいっぱいあって、うまくいかないこともあったけど、また参加したいと思った。
- 班の仲間やみんなと料理やキャンプファイヤーなどで、わいわい楽しむことができた。6年生なのでもう参加できないけれど、もう1回参加したいという気持ちになった。
- みんなといっしょに2日間生活できて楽しかった。
- もっといろんなことに挑戦したい。

《アンケート結果の考察》

初めて会った友達と交流する中で、仲間と協力する良さを感じ、自らすすんで他者と関わろうとする意識が芽生えたことがわかる。また、さまざまな活動を通して挑戦意欲が高まり、体験することへの興味・関心が高まったことがうかがえる。

《成果と課題》

○活動予定がタイトな時間になっていたものの、「自分のことは自分で」という意識づけや名札の裏に日程表を記載して次の活動を確認できるようにしたことで、子供達からは次の活動を意識した行動が多く見られ、予定通りプログラムを進めることができた。

○募集人数25名のところ45名の参加申し込みがあったが、全員の参加を受け入れ、新型コロナウイルス感染症予防対策を徹底して事業を実施した。人間関係の希薄化が心配される中、ボランティアの働きかけの工夫により、初めて会った仲間との関係づくりも良好に行われ、自分から仲間と関わろうとする姿が多く見られるようになった。

●さらに子供達の成長を促すためには、プログラムの内容を工夫し、職員とボランティアが連携を強化する中で、子どもたちへのはたらきかけをどのように行っていったらよいかを考えていく必要がある。